

巨樹・巨木シリーズ31 3月号 宮城県-1

細田木材工業株式会社
顧問 細田 安治

岐阜県シリーズが4回まで続いたのは、岐阜県には有名樹が多いからではないか。なかでも前号で紹介した、高碓達之助氏の「庄川ザクラ」に筆者は深い畏敬の念を覚えた。というのは、ダム建設のために水底に沈むことになる樹齢400年を越える2本のサクラの移植に成功した快挙に心打たれたからである。移植を成功させた高碓達之助氏と技術陣の偉業、移植という厳しい環境にもくじけず蘇った偉大なサクラを拝観し、この巨樹に直接手を触れ、感触を確かめたい。

さて今号から宮城県の巨樹をU氏の資料をもとにご紹介していく。

宮城県は人口約222万人、仙台市を中心にして行政、経済、歴史、観光の面において東北の要といえよう。県内は、太平洋の海岸線から西部の山々まで、豊かな自然に恵まれている。観光地の松島は、松の木が茂る島が250も浮かぶ松島湾に面し、宝物館や瑞巖寺もある。県庁所在地の仙台市には、17世紀に戦国武将の伊達政宗が建てた仙台城の遺構が残っている。(インターネット情報参照)

写真番号1 樹番号1 丸森のイチョウ

樹齢700年、樹周11.6m、樹高42m 宮城県伊具郡丸森町四反田(個人宅敷地内) 宮城県指定天然記念物

このイチョウは街道(和田通り)に面していることから昔から目印にされていた。地上5.6mで二幹に分かれているが、近くに類を見ない大木である。このイチョウは雄の樹で実を結ばないが、晩秋黄色に色付いた葉が風に飛ばされる風景は見事だという。樹勢も旺盛だ(宮城県ホームページを参考)。

丸森町のホームページより、このイチョウにまつわる伝説をご紹介します。

昔、お百姓の庄吉が病で寝込んでいると、夢にお地藏様が現れ、「大イチョウの下を掘れ」といわれた。大イチョウの下を掘ると、観音様が見つかり、庄吉は元気になった。人々はその観音様を「庄吉観音」と呼んでお堂を立てて祀ったという。現在お堂は壊れてしまい、丸森町の西円寺に祀られているという。

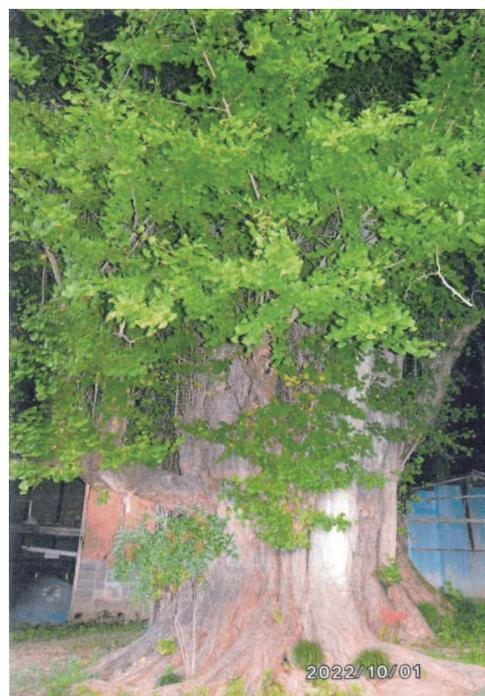


写真1 丸森のイチョウ

<筆者のつぶやき>

このイチヨウの直立した樹相は、雄樹ならではの他を寄せ付けない毅然とした風格を備え、あたりを威圧しているようにみえる。雌樹にある乳頭がなく、まったくすっきりとした立ち姿ゆえか。さすがに、宮城県指定の天然記念物であると評価した。これまでご紹介したイチヨウのなかでトップクラスの巨樹といっても過言ではない。このイチヨウも拝観したい巨樹の一つである。

写真番号2 樹番号2 称名寺のシイノキ

樹齢700年、樹周10.2m、樹高14m 宮城県亶理郡亶理町旭山 国指定天然記念物

このシイノキは称名寺本堂左手にある。土から大きくはみ出している根は四方八方へたくましく広がっている。なかには洞をもつ実に堂々たる巨樹である。

称名寺は県指定の文化財、木造阿弥陀如来像を御本尊としている。この如来像は源頼朝から伝わったといういわれがある(宮城県ホームページなどを参照)。

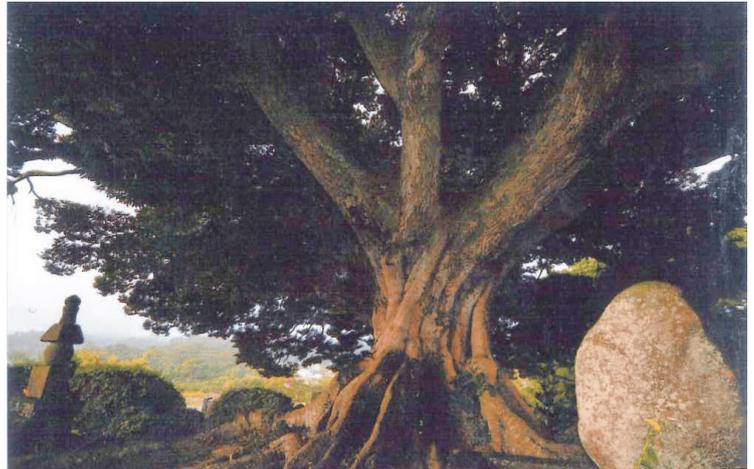


写真2 称名寺のシイノキ

<筆者のつぶやき>

この巨樹は昭和18年(1943)、国の天然記念物に指定されている。北限を越えたシイノキとして大きな価値がある。一般的にシイノキの北限は福島県いわき市と言われている。この周辺にシイノキは自生していないことから、移植されたことは確かのようなのである。このことから、このシイノキが称名寺創建の頃、鎌倉武士の手によって持ち込まれたのでは、と伝えられている。(宮城県ホームページなどを参照)

鎌倉武士の意気込みが植物の北限を越えたのではないかと筆者は想像する。人間の意気込みが自然を動かした大きな出来事、素晴らしいではないか。こんなふうには想像を膨らませるのは、楽しいですね・・・

この写真をよく見ていると、「ラジオ体操第二4番」の腕を大きく広げる運動にそっくりに見える。幹の部分がしっかり大地を踏み固めている姿は力強い。

この巨樹に従うようにスタジイがある。主人を守る従者のごとく侍っているように見える。こちらは樹齢300年と言われているが主人のシイノキに比べひと回り小さく若い分、樹勢が強く葉は青々と茂っている。平成24年(2012)に県の天然記念物に指定されている。

「鎌倉武士が木を植える～」というところから、人々の生活と植木とのかかわりについて思い出したことがあるので、述べたい。

■キリ

・キリは嫁入り道具

昔から木は財産として物入り行事のために植え育てた風習が昭和の時代まで残っていた。農家では女の子が生まれるとキリの木を植えて大事に育て、お嫁に行くときキリの木を倒してタンスを作り、嫁入

り道具のキリ箆筒を作ったという。

高貴の方のお祝い事には三点セット（和服用の和箆筒、洋服用の洋箆筒、子供用のベビー箆筒）が用意された。さらには、箆曲用の琴を作り嫁入り道具として娘に与えた風習もあった。

- 丸太と箆筒や琴との交換

ここで木材やから言わせてもらえば、キリの木を倒してすぐに箆筒を作れるものではない。琴なども同様である。倒したキリ丸太を家具屋さんに引き取ってもらい、代わりに家具屋さんの在庫にある狂いのない材料で箆筒を作ってもらうのである。生まれたときに植えた木で、嫁ぐときの道具をあつらえるというのは、話としては実に趣があるが、実際は違うのである。

- 10年近い養生

キリの木が箆筒や琴に使われるまでには長い時間寝かせて乾燥させる。狂いを取るために長い時間が必要なのである。

大きな家具屋さんでは雨に打たせ、乾燥させて10年近くの養生期間を持たせる。半世紀近く前になるが、新潟の家具団地にある家具屋さんを訪問したとき、キリ材の大量在庫に圧倒された記憶がある。

人工乾燥すれば期間は短くなるが、キリ材の人工乾燥はなかなかの難物で一般的には普及しなかった。

- キリは火事にも水にも強い

キリの木はたとえ火事になっても燃えにくいいため、鉄製金庫の内部はキリ材でつくられている。昭和20年3月10日の東京大空襲一面焼け野原に金庫だけがぼつんと残っていた。持ち主が金庫をこじ開けると内部造作のキリ材は燃えずに残っていたと言われている。また消火のため、水をかけられてもキリの木はビクともしない。キリ箱の書類は守られている。このような話が残っているのは、それだけキリの木は、貴重な木であることを強調しておく。

■ケヤキ

- ケヤキも同様

ケヤキの木も同じように木は大きな財産として物入りのときに備えていた。ケヤキ箆筒はご存じのとおり、主に東北地方でつくられていた。大きな金具付きのケヤキの箆筒もキリ同様セットとなっていた。

加えてケヤキは、住宅の階段の下の斜めの空間に取り付ける引き出しにも使われている。東北地方の農家や旧家では階段の斜め部分の空間をこのように無駄なく使っていた。

- ケヤキの家

ケヤキの大黒柱に囲炉裏があり屋根にはうだつがある農家、ケヤキの家具、ケヤキの階段はこのような構えの旧家に似合っていた。戦後の住宅ブームは家具ブームを呼び、木材の多くが売り手市場、ケヤキ箆筒の無垢材は材料が間に合わなくなり、ツキイタを使い始めた。流行し始めた洋家具と材料の奪い合いが始まり、この結果、無垢材の家具はほとんどが姿を消した。だがどっこい残っていたのはキリ箆筒である。

写真番号3 樹番号4 平沢の^{みだ}弥陀のスギ

樹齢約900年、樹周9.7m、樹高45m 宮城県荊田郡蔵王町平沢六 宮城県指定天然記念物

県内最大級の大スギで、もとは平安時代末期に植えられたものだ。この地は安養寺丈六阿弥陀堂の参道で、往時は20本以上の大スギが並んでいたという。江戸時代中期に本尊の阿弥陀如来の修復費用として6本が伐採されるなどして、明治のはじめごろまでにはこの1本を残すのみとなってしまった。

明治時代に産科医の五十嵐^{ぶんすい}汶水がこの地に「だるま講」という安産祈願の女人講を開いたことから、この木は「だる마스ギ」と呼ばれるようになった。汶水は伐採された杉並木を惜しんで^{かいせきめい}戒石銘を残した。昭和の初めにある者がこの木を伐採しようと斧を入れたが、村人たちが根元にしがみつき守ったため、かなわず退散した。その後、村人達は斧傷に餅を練り付けて木の回復を願ったと伝えられている。五十嵐^{ぶんすい}汶水の戒石銘をご紹介します。

村役方 この大杉を永世伐らせないでください

われという そのみなもとをたずぬれば あともかげなき かげぼうしかな

(以上、インターネットの情報参照)



写真3 平沢の弥陀のスギ

<筆者のつぶやき>

この木の写真を一目見たとき、この木がスギなのか??と一瞬、探索者U氏が間違えたのかと思うほどの、凄まじい雰囲気の大巨樹であった。幹はどうみてもスギの雰囲気からほど遠い。根元はかなりおきなウロをもち、根はタコの足のよう絡み合っている。

幹の絞りも尋常な絞りではなく、人にたとえれば胴体を絞るように縦に絞りあげられ、水気がなくなったタオルのように絞れた幹、即ち胴体が水気なしの縦じまに絞りあげられた人、人では死んでしまいそうな樹相である。

その上に太い枝が大きく四方に延びている。幹の中央部分には雷落ちを受け止めたあとが黒く焦げており、この部分だけ見ても迫力がある。雷に打たれ火が付き焦げるほど痛められた跡はこの巨樹の歴史を物語っている。(続く)